

# ソシユール言語学と翻訳<sup>1)</sup> ——小林英夫と時枝誠記の邂逅——

松 中 完 二

## 0. はじめに

現代言語学はその形成と発展の多くを、1916年に出された Saussure の *Cours de linguistique générale* (以下 *CLG* で表す) での学説に負っている。Saussure の学説は世界に先駆けてわが国においていち早く紹介、導入された。同書は1928年に小林英夫によって邦訳され、『言語学原論』(岡書院)のタイトルで出版された。わが国における Saussure 学説の導入は、小林英夫による邦訳に集約される。

1916年の *CLG* の刊行以来、20世紀中における Saussure 学説の研究では *CLG* と小林英夫によるその邦訳が主たるものとして扱われてきた。また、いわゆる“時枝・服部論争”で時枝が批判を展開した Saussure 学説は、全て *CLG* と『言語学原論』、『改訳新版 言語学原論』を基にしたものである。

そこでの論争で、Saussure 学説を前面に立って批判した国語学者、時枝誠記に対する反論の主たるものが、時枝が小林による日本語訳を介してしか Saussure の学説を読んでおらず、原典に当たっていないための誤訳に基づく誤解であるというものである。だが時枝は本当に Saussure の学説を日本語訳でしか読んでいなかったのであろうか。また誤訳に基づくとされる時枝の Saussure 学説への反意が、今日的に見れば1996年に発見された Saussure の自筆草稿と底通するのはなぜなのか。この点について時枝の著書をはじめ様々な論考を基に解明する。

## 1. Saussure の *Cours de linguistique générale* (*CLG*) と小林英夫訳『言語学原論』

Saussure の学説は1916年に出された *CLG* と小林英夫(1903-1978)によるその邦訳『言語学原論』<sup>2)</sup> (以下『原論』で表す)、『改訳新版 言語学原論』<sup>3)</sup> (以下『改訳』で表す)、『一般言語学講義』<sup>4)</sup> (以下『講義』で表す) に集約される。

*CLG* は1907年、1908~1909年、1910~1911年に、ジュネーヴ大学で Saussure が三回にわたって行った一般言語学の講義を聴講した学生達の取ったノートを、Charles Bally と Albert Sechehaye が Albert Riedlinger (スイス 1891-1913) の協力の元に、再構成、統合して編纂したものである。また編者の Bally と Sechehaye が、三回にわたる一般言語学の講義のどれにも出席していなかったため、*CLG* の記述の信憑性に対する疑問の声があるのも事実である。しかしそこでの思想が、洋の東西を問わず、後の言語学者達の言語研究の基盤と

なっていることも、また覆しようのない事実である。当時時枝が批判を展開した Saussure 学説は、全て『原論』と『改訳』を基にしたものである。

わが国に *CLG* の存在が初めて紹介されたのは、神保格 (1922)<sup>5)</sup> によってである。その後同書は 1928 年に小林英夫によって邦訳され、出版された。これは *CLG* の翻訳としては世界で最初のもので、その後、1940 年に岩波書店からその『改訳』が、更に 1972 年にその改版として『講義』が出されている。同書のドイツ語訳が出版されたのが 1931 年、次いでロシア語訳が出版されたのが 1933 年、更にスペイン語訳が出版されたのが 1945 年、最後に英訳が出版されたのは更に遅く、戦後の 1959 年であったことを考えれば、世界に先駆けて 1928 年という早い時期に日本語訳が出版されたのは、驚異的である。また英訳版が最も遅かったという事実は、第一次世界大戦による北米とヨーロッパの断絶、更にその後の第二次世界大戦でのその断絶の拡大という時代背景による要因が少なくないが、加えてヨーロッパ構造主義とアメリカ構造主義における Saussure 学説の受容と抵抗といった要素も皆無ではないと思われる。

*CLG* は、Bally と Sechehaye による再編纂ということもあり記述や用語に統一性が見られにくく、それが *CLG* の解釈をめぐる様々な議論を引き起こす一つの要因となってきた。しかもわが国での Saussure 学説の解釈の特異性は、その多くが原典ではなく小林訳という翻訳を介した上で、そこでの術語をめぐる議論であったことが少なくない。事実、後に起こるソシユールの学説をめぐる繰り広げられた“時枝・服部論争”は、*CLG* をめぐってというよりも、むしろ『原論』での術語とその解釈をめぐるなされた部分が多い。その後、Saussure 自身の手稿を含む原資料が 1955 年と 1958 年に相次いで発見されたため、*CLG* をめぐる疑問や問題点の幾つかはそこで解決を見た。更に 1996 年に Saussure の屋敷の庭仕事用倉庫から Saussure 自身による手稿の束が発見され、そこから Saussure 文献学と Saussure 学説はこれまでも増して見直しや修正を迫られることとなった。そこで発見された原資料は、大別すると以下のように分けられる。

1. Saussure の手稿の発見。(1955 年 1 月)
2. Saussure の第二、第三回講義の聴講生である E. Constantin によって書きとどめられた講義内容のノートの発見。(1958 年)
3. 再度発見された Saussure の手稿。(1958 年)
4. フランス国立図書館に所蔵されている Saussure の書簡類。
5. ハーバード大学ホートン図書館に所蔵されている Saussure の手稿。
6. レニングラードの科学古文書館に所蔵されている Saussure の書簡類。
7. Saussure の屋敷の庭仕事用倉庫から Saussure の手稿の発見。(1996 年)

1～6 までの資料の大半は Godel (1957)<sup>6)</sup> と Engler (1968)<sup>7)</sup> に収められており、今日

Saussure 学説について触れる際には、Bally と Sechehaye による *CLG* のみではなく、Godel (1957) と Engler (1968) の原資料に当たることが Saussure 研究の基本的手順となっている。こうした Saussure の手稿の出版とわが国での翻訳の流れをまとめれば、以下のようになる。

- ・ 1916 年、Bally と Sechehaye による *Cours de linguistique générale* (1928 年 1 月、小林英夫訳『言語学原論』岡書院) の刊行。
- ・ 1940 年 3 月、小林英夫訳『改譯新版 言語学原論』(岩波書店) の刊行。
- ・ 1957 年、Godel による *Les Sources Manuscrites du Cours de Linguistique Générale de F. de Saussure*。(1971 年 4 月、山内貴美夫訳『ソシュール 言語学序説』勁草書房；1984 年 3 月、新装版、勁草書房) の刊行。
- ・ 1967 年、Tullio de Mauro による *Ferdinand de Saussure Corso di Linguista Generale Introduzione, traduzione e commento*。(1976 年 7 月、山内貴美夫訳『「ソシュール一般言語学講義」校注』而立書房) の刊行。
- ・ 1968 年、Engler による *Cours de linguistique générale, Edition critique*。(1991 年 9 月、前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』法政大学出版局) の刊行。
- ・ 1972 年 12 月、小林英夫訳『改版改題 一般言語学講義』(岩波書店) の刊行。
- ・ 1993 年、小松英輔による Constinin のノート (Pergamon) の刊行。
- ・ 1993 年、小松英輔による Riedlinger と Constinin のノート (学習院大学) の刊行。
- ・ 2002 年、Simon Bouquet と Rudolf Engler による *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale* (Gallimard) の刊行。
- ・ 2003 年 2 月、相原奈津江・秋津伶訳、西川長夫解題『一般言語学第三回講義——エミール・コンスタンタンによる講義記録』(エディット・パルク) の刊行。
- ・ 2006 年 11 月、小松英輔編、相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第二回講義——リードランジェ／パトワによる講義記録』(エディット・パルク) の刊行。
- ・ 2007 年 3 月、影浦峽・田中久美子訳『ソシュール一般言語学講義——コンスタンタンのノート』(東京大学出版会) の刊行。
- ・ 2008 年 3 月、小松英輔編、相原奈津江・秋津伶訳『一般言語学第一回講義——リードランジェによる講義記録+付・エングラー版批判』(エディット・パルク) の刊行。
- ・ 2009 年 3 月、小松英輔編、相原奈津江・秋津伶訳『増補改訂版 一般言語学第三回講義——コンスタンタンによる講義記録+ソシュールの自筆講義メモ』(エディット・パルク) の刊行。
- ・ 2013 年 1 月、菅田茂昭対訳『一般言語学講義抄』(大学書林) の刊行。
- ・ 2013 年 5 月、2002 年刊行の Simon Bouquet と Engler による *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale* (Gallimard) の邦訳版となる、松澤和宏校注・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集』全 4 巻の第一回配本開始。「I 自筆原稿

『言語の科学』の刊行。

前述したように *CLG* は Saussure の直接の手によるものではなく、1913 年に Saussure がこの世を去ってから 3 年目の 1916 年に、教え子の Sechehaye と Bally によって刊行された死後出版である。しかも Bally と Sechehaye は Saussure の講義に出席しておらず、*CLG* は Sechehaye による独断と再創作といってもよい。そこでの記述は Saussure の思想の断片が都合よく切り貼りされたパッチワークに過ぎず、それがつぎはぎだらけの *CLG* の記述の“ムラ”となって表れていることは、早くから指摘されてきた。はたしてそこに Saussure の真の言葉と主張がどれだけ盛り込まれているかは、はなはだ疑問である。

そして、これら一連の Saussure 研究や Saussure 文献学の進展を元にわが国では丸山圭三郎が中心となって Saussure 学説の紹介や修正が試みられ、それは『ソシュールの思想』<sup>8)</sup>、『ソシュールを読む』<sup>9)</sup> で結実するに至るのである。その後、前田英樹訳・注<sup>10)</sup> や小松英輔<sup>11)</sup> による Constantin の第 3 回講義ノートの出版で大方の問題に対する修正と解答が見られたが、1996 年に Saussure の邸宅にある庭仕事用の倉庫から手稿の束が発見される。その後 Saussure 文献学の世界では、相原奈津江・秋津伶<sup>12)</sup> による *CLG* の一連の翻訳、町田健<sup>13)</sup> や加賀野井秀一<sup>14)</sup>、相原奈津江<sup>15)</sup> らによる Saussure 研究、松澤和宏<sup>16)</sup> による *CLG* の新たな翻訳という一連の流れによって加速度的にその形を完成させつつある。

松澤和宏校注・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集「I 自筆原稿『言語の科学』』』は、それまで主流であった小林英夫訳による *CLG* の邦訳に対して一線を画するものとして、ここでは特に大きな意味を持つ。ではなぜ、それまでの Saussure の学説と *CLG* に線を引く必要があったのか。そこに回答を与えるのが他ならぬ小林英夫訳による *CLG* の邦訳と Saussure の自筆草稿であり、更には今日になってこそ分かる、Saussure の学説に反意を露にしてきた時枝誠記の主張である。

## 2. 時枝誠記の『国語学原論』

Saussure の学説はわが国において最も敏感に受け入れられ、その主張について様々な賛同や反論を生んだ。そこでの最も大きな反論の一つが、当時の国語学者、時枝誠記 (1900–1967) が打ち立てた「言語過程説」と呼ばれる学説を基にした、Saussure 学説への抵抗である。我が国における Saussure 学説の受容は、これら一連の抵抗と共に進んできたと言える。

時枝誠記の学説である「言語過程説」は、その具体的な研究方法はともかく、そうした研究法を支える基本的原理において、一般的にわが国では Saussure の学説に対抗するものとして捉えられている。またそうした姿勢は、時枝自身も自ら明言している。そしてその上で、時枝は *CLG* で述べられた Saussure の研究姿勢に対して、次のように正面からそれを否定する。

対象の観察とその分析は、その対象に規定されるということは、本論の最初に私が述べたことである。(中略) 私は、この、対象が方法を規定するという仮説的理論に立つて、言語研究の方法は、先ず対象である言語自体を観察することから始められねばならないと考えるのである。言語学の体系は、実に言語そのものの発見過程の理論的構成に他ならないのである。(中略) ソシュールが、言語の分析に用いた方法を、その対象との相関関係に於いて見る時、はたして右の如き方法が守られているであろうか。ソシュールの言語理論に対する疑は先ず最初にこの点に存するのである。<sup>17)</sup>

そして自らの学説が、こうした Saussure の学説に範を取る、従来の構造主義的な言語研究の在り方に抗するものであることを次のように述べている。

従来の構成主義的言語学の問題が、専ら言語の構成要素に置かれているのに反して、言語過程説に於いては、言語の過程的構造を中心として問題が展開するのである。それは言語の本質を心的過程と見る必然の帰結といわなければならない。過程的構造こそ言語研究の最も重要な問題が存するのである。<sup>18)</sup>

このように Saussure 学説の否定によって成り立つ時枝学説が、Saussure 学説に強く影響を受ける当時の我が国の国語学界、ひいては言語学界において受け入れられ難い側面を持ち、Saussure 学説に賛同する研究者達から少なからず反発を受けるであろうことは、容易に想像がつこう。時枝学説に対する賛同と抵抗を基に、時枝の Saussure 学説の解釈をめぐって、その後約二十年近くにわたって日本の言語学者達の間で交される論戦が、いわゆる“時枝・服部論争”である。そして Saussure 学説を前面に立って批判した時枝誠記に対する反論の主たるものが、時枝が小林による日本語訳を介してしか Saussure の学説を読んでおらず、原典に当たっていないための誤訳に基づく誤読であるというものである。

### 3. Saussure と翻訳

「Saussure にまつわる不幸は二つある。一つは思想内容の不理解、もう一つは翻訳である」

これは Saussure 学説の受容に際してよく言われることである。ここでは Saussure に関わる後者の不幸、すなわち翻訳によってもたらされる不幸について、翻訳そのものの性質と絡めて考えてみたい。

時枝を批判する言葉として、小林英夫による以下のものが代表的である。ここでの「かれ」とは時枝を指している。

かれのソシュール理解なるものは、多くのばあい「原論」の初めの数章を読んでえた印象をもとにして成立したものであり、けっして全巻を読破した上これを構造的に把握

して成ったものではないのである。かれは暁星中学の出身ではあったが、大学を出たころはその仏語力の大半を喪失しており、もっぱらわたしの訳書を通じて泰西の言語学説を吸収することを努めていたようである。<sup>19)</sup>

時枝がフランス語を解しないという指摘に対しては、もっぱらこの小林の言葉を敷衍したものが多し。時枝の Saussure 学説批判は小林による日本語訳を基になされたものであり、時枝には CLG をフランス語の原文で読み解くほどの語学力がなかったというものが根強くあるが、これは私個人があらゆる関係筋に確認した限りでも正しくない。むしろ時枝はフランス語と CLG の原典には通じていたものの、より一般向けに小林訳を足場にした節がある。その証拠に、時枝は自身の言語過程説の説明で小林訳でも見られない CLG での術語のみならず、

ソシユールもいう如く、この「言語」なるものは、概念と聴覚映像とが密接に結合されて居って、互に喚起し合う所のものである（言語学原論一三五頁）。原文に於いては、*Ces deux éléments sont intimement unis et s'appellent l'un l'autre. (Cours de linguistique générale p.99.)*<sup>20)</sup>

という一文にも代表されるように、CLG での一文をフランス語の原文のまま引用して示しており、明らかに原文を読んだ足跡があちこちに散見されるのである。時枝自身は英語の代わりにフランス語が教えられていた暁星中学の出身であり、暁星中学時代からフランス語には堪能であったと言われている。また東大教授時代には、「国語学概説」、「国語学概論」の講義において、CLG の要点をフランス語で黒板に書き出し、それに基づいて講義を行っていたという事実を時枝の教え子たちから確認済みである。こうした事実を鑑みると、これまで多くの時枝反対派が述べてきたような、時枝が CLG を解さずに小林による翻訳を介して CLG の学説を読み誤ったといった主張は、決して真実ではない。

松中 (2015)<sup>21)</sup> で検証したように、Saussure と時枝の学説に踏み込んでいけばいくほど時枝が Saussure の原典と底通し、時枝が Saussure の原典に当たっていないという批判が事実無根であることが確認されるのである。

では Saussure にまつわる歪曲は、いったいどこから来るのか。Saussure 学説の英訳に取り組んだ人間は例外なく、その基本的専門用語の英訳の困難さを訴える。これは英訳に限らず、どの言語への翻訳でも同様である。原典を読むと、問題の根源は Saussure 学説における専門用語に対応する言葉が存在しないことではなく、原典であるフランス語の用語そのものの曖昧さが問題であることに気付かされる。

小林英夫による CLG の翻訳は、世界に先駆けて翻訳されたこととその後の言語学や Saussure 研究に大きな一歩を記したという点で、その存在価値と役割は高く評価されて然る

べきであるが、反面、翻訳として多くの問題を内包しているのも事実である。この点について、相原奈津江・秋津伶訳 (2003) において西川長夫は次のように述べている。

ソシユールにかかわるもう一つの不幸は翻訳に由来するものである。(中略) 世界各国に先駆けて、原書の出版の十二年後に日本語訳が出たということは、誇るべきことだと思う。また小林英夫訳が、日本の言語学やソシユール研究に果たした役割は高く評価されるべきだろう。だが、小林英夫訳『言語学原論』は翻訳として多くの問題を残している。<sup>22)</sup>

しかし、だからと言って小林の翻訳が技術的に拙いということを意味しているわけでは決してない。翻訳はあくまで原文に忠実に他言語に置き換える作業である。よって、原文が優れていれば優れた翻訳に、原文が稚拙であれば稚拙な翻訳に、原文のミスはそのまま翻訳のミスに移し替えるべきであり、翻訳のあり方としては黒子の役割に徹すべきだからである。したがって、原文の不自然さや不整合をそのまま翻訳に移し替えた小林の翻訳技法とそのレベルの高さについては何の問題もない。もともとの原文が不自然さや不整合に満ちているのだから、そこに訳者の手を入れることは原文に対する裏切りであり、訳者の勝手な創作であり、原文に忠誠を欠く行為以外のなにものでもない。小林の訳は原文を等価に訳文に移し替えているのであり、その点でも小林の訳は秀逸なのである。また *CLG* の不自然さが小林訳にあるのではないということは、以下の小松英輔の言葉に全て集約されている。

われわれは時として小林英夫訳『一般言語学講義』(旧版は、『一般言語学原論』) を読んで、その言葉づかいの不自然さ、接続詞の不明瞭さに気がついて原著をひもとくことがある。たいていの場合フランス語の原文にもその不自然さは残され、どこからそれが生れたかと思う。原因は原文のテキストが均一の織物でできていないからだ。<sup>23)</sup>

しかもこうした不整合や不自然さから透けて見える *Saussure* の原文とその内容の深遠さ、表現の明晰さには当初から小林自身も気付いており、それは『講義』の「訳者のはしがき」における、

原文は明晰をきわめた規範的フランス文のようにわたしには思われる。もし本書を難解と評するならば、それは思想そのもの、記述内容そのものの深さによるものであって、壘も文章のせいではない。記述内容を砕いてまで文章の平易化をはかろうという気持ちは、わたしにはない。<sup>24)</sup>

という小林自身の告白からも明らかである。同様の感想は相原奈津江と秋津伶も、「訳者あ

とがき」で次のように語っている。

原文の明晰さはその通りだが、それが勢い余って内容まで単純化しているように思われて仕方がない。それに反して、訳文は、難解さに満ちている。<sup>25)</sup>

時枝による Saussure 学説批判とそれに対する服部四郎らによる反論を基にしたいわゆる“時枝・服部論争”の根本的な論点が、Saussure の原典の複雑さとその時代的制約という性質によって歪められていたことは否めない。丸山圭三郎は“時枝・服部論争”における一連の論争の特異性について、翻訳の問題から次のように述べている。

ところで面白いことに、ソシユールに対する誤解ないし批判は、我国における現象と、アメリカのそれと、そしてヨーロッパにおけるものが、それぞれ三者三様、独特のニュアンスを呈している。日本においては、何よりもまず翻訳自体の問題を無視するわけにはいかない。我国の特殊事情は、『講義』自身というよりは、その翻訳をもとに論争が行われた点にあり、日本においてはソシユール現象そのものが二重だと言うのも、そのような意味からである。<sup>26)</sup>

同様に、井島正博(2007)は次のように指摘する。

時枝は『国語学原論』の中で、ソシユールを「言語構成観」に立つ研究者として批判し、自らの「言語過程観」を称揚する。しかし、ソシユールには、先に見たように、文法に関わるような発言はほとんど見られない。時枝の言語過程説は必ずしも文法に限られた理論ではないとしても、そこで批判されているソシユールは、実像とは大きくかけ離れていることは否めない。<sup>27)</sup>

また Saussure 学説の翻訳の特殊性については CLG の記者である小林英夫自身、次のように語っている。

言語と思考との関係の問題は別として、わたしは訳出の仕事のうちに少なくとも国語的必然の問題と、表現的必然の問題と、さいごに翻訳術そのものの問題との三つをかぞえるのである。およそ翻訳をなそうと思えば、この三つの問題にはいやでもぶつからざるをえない。そうしてそのいずれにも言語学者の注意をよぶ権利があるであろう。(中略)かれは原文における A の表現がなにゆえに、かれ自身の国語に移すさいには、それに対応する表現 a をもってせずに b をもってせざるをえなかったかを知っている。かれは原文における A の表現がなにゆえにそれに対応する a をもって移しうるにもか



からわず **b** をもって移したかを知っている。そうした自覚を多くもつときは、およそ **A** のごとき表現に遭遇したばあいには、いかにしてそれを自国語に移植すべきかを悟るようになる。<sup>28)</sup>

小林のこの言葉は、極めて示唆的である。翻訳にまつわる普遍的問題については、すでに *CLG* において、次のようにその原点的示唆が提示されている。

Si les mots étaient chargés de représenter des concepts donnés d'avance, ils auraient chacun, d'une langue à l'autre, des correspondants exacts pour le sens; or il n'en est pas ainsi. <sup>29)</sup>

もし語というものが、あらかじめ与えられた概念を表出する役目を受け持ったものであるならば、それらはいずれも意味上精密に対応するものを、言語ごとにもつはずである；ところが事実はそうではない。<sup>30)</sup>

小林訳の『原論』に対して述べられた、相原奈津江・秋津伶訳における西川長夫の次の言葉には考えさせられるところが大きい。

私がここで言いたいのは用語や誤訳といった問題ではなく、翻訳とはそもそも何のために、誰のために行われるかという問題である。私は学生時代フランス語フランス文学科に在籍していたからソシュールは必読文献であった。怠け者の学生としてまず翻訳を読み始めた私は、異様な文章に接し、言語学と言語学者に対する無用の偏見を抱いてしまったのだと思う。『言語学原論』はそのころ（60年代）は岩波書店から改訳新版が出ていたが、それでも読者を遠ざけるには十分な言語学者的文体であった。<sup>31)</sup>

また相原奈津江は小松英輔 (2011) の編者はしがきにおいて、翻訳の役割として、

翻訳は二次的資料でしかなく、訳者の主観的な解釈を避けることが出来ないのも、訳者の数だけ翻訳があり、それを豊かさとして捉えてもあながちの外れとは言われないう。だが、校訂版にそうした解釈の豊かさがあるとはならないはずだ。公開された校訂版が横にあって、初めて翻訳や研究の評価も成り立つ。<sup>32)</sup>

と述べる。

学問的内容の翻訳は権威的に「もったい」をつけて形から難しくし、読者に威光を見せ付け、そのハードルを超えた者だけが学説の真の深淵に到達できるという排他主義による誤った優越感を植え付けるのがその役目とでも考えているのであろうか。だとしたら日本人は不

幸である。それ以上に原著者が、そして Saussure が不幸である。翻訳による歪曲によって、どれだけ著者の考えや原文の内容が毀傷されているかについては、Saussure 学説のわが国への導入が全てを物語っている。

#### 4. 小林英夫と時枝誠記

CLG の翻訳を行った小林英夫も、Saussure の学説に対抗した時枝誠記も、共に京城帝国大学（韓国、ソウル市）の教授の職にあった。当時の最も先進的な言語理論の受容と抵抗が、共に植民地下での同じ大学で行われたことは興味深い史実であると同時に、むしろ同じ大学を同じ職場としていたからこそ、当時の先進の言語理論に対する受容と抵抗が起り得たと考えられる。

後年、CLG の訳者である小林は時枝との邂逅を次の様に語っている。

かれの有名な言語過程説の解説や批判を今ここでおこなうつもりはない。ただここで明らかにしておきたいことは、その出産の秘密である。結果においてたとえ消極的であろうとも、右の意味で、かれもまたソシュールの影響下にあることは認めざるをえないところである。（中略）ちなみに言語の成立をもっぱら個人心理学的に考えたところにも、時枝説は少壮文法学派の理論的代表者ヘルマン・パウルに復帰した観がある。<sup>33)</sup>

小林のこの言葉は、時枝と Saussure の研究姿勢が共に同じ土壌にあったことを如実に物語っている。事実、言語とは *une entité psychique*（小林英夫訳「心的実存体」）ではなく、話者と聴者の間に成り立つ「行為」とその「過程」によって決定され得るものであるとする時枝学説の出発点が、原資料によって示された Saussure の言語研究の出発点と酷似していることは、疑いようのない事実である。

このことについて、井島正博は次のように指摘する。

時枝は『国語学原論』の中で、ソシュールを「言語構成観」に立つ研究者として批判し、自らの「言語過程観」を称揚する。しかし、ソシュールには、先に見たように、文法に関わるような発言はほとんど見られない。時枝の言語過程説は必ずしも文法に限られた理論ではないとしても、そこで批判されているソシュールは、実像とは大きくかけ離れていることは否めない。<sup>34)</sup>

Saussure 学説のわが国への導入の立役者となった小林英夫は、当時の言語学界においてどのように扱われていたのであろうか。CLG の最初の邦訳となった『原論』初版当時、小林は弱冠 25 歳であり、新進気鋭の学者として小林を持ち上げる声は当時から多かった。その代表的なものが、小林の学問的師匠である金田一京助の次の言葉であろう。

訳者小林英夫氏は、昨年東大の言語学科を出た新進の学者である。ラテン・ギリシア・サンスクリットの古典語の修養は云うに及ばず、現代の欧洲語は、英独仏露を始めとして、蘭・西・伊・丁・諾・瑞・蘭の十数個国語を読み且つ話す天稟の語学者である。その各国語で書かれた言語学上の新論述を渉獵して若齡既に斯界の堂に参入している。我国に於けるソシュールの訳術は、蓋しよくその人を得たるもの。<sup>35)</sup>

金田一のこの言葉が、当時の小林の研究者としての位置付けを決定したと言っても過言ではない。事実、それに追従するかのように福井久蔵は、

昭和の初に至り若き語学の天才小林英夫氏が出で、フランコ・スイス学派のソシュールの言語学原論を昭和三年に訳出し、(中略)また、地理言語学や逆説言語学をも紹介してから斯界に別個の新しい雰囲気を生ずるに至った。<sup>36)</sup>

と小林を絶賛し、亀井孝は、

この原著を小林英夫が各版参照して厳密に訳出した。『言語学原論』昭三(初版)、昭十五(改訳新版 岩波書店)。これによってソシュールの学説が国語学界へそのまま正しい姿で紹介された。国語学者の間にソシュールのすぐれた思想が、いちはやく浸潤したこと、訳書のみによってソシュールを論ずるを得しめたこと(例えば、時枝誠記『国語学原論』を見よ)は、ひとえに良心的な訳書を世に送った小林の功に帰せられる。<sup>37)</sup>

と賞賛する。また驚くべきは、Saussure 学説に異を唱える時枝自身もまた、

(前略)昭和の初め、小林英夫氏は、フランコ・スイス学派のソシュールの言語学説を紹介された。この言語学説は、従来の史的言語学に対して、言語の体系的な研究を力説し、そこから言語の諸現象を説明しようとしたものである。言語の研究が、史的研究以外に重要な研究領域を持つものであることを教えた功績は忘れることが出来ない。<sup>38)</sup>

と、小林と『原論』に対して評価を与えているのである。こうした文面を見るだけでも、Saussure の学説に対する期待に満ちあふれた新風と、それを邦訳しわが国に紹介した小林の一種の英雄ぶりとその持ち上げられぶりが感じられようというものである。そのような中、小林の訳や Saussure の学説を批判することは、時代の波に逆らい、斯界の人間全てを敵に回すドン・キ・ホーテ的所業であつたらうことは想像に難くない。

しかしこの時代に Saussure の学説を正しく理解できていた人間がどれだけ存在していたのか疑問である。高木敬生(2014)<sup>39)</sup>も指摘するように、Saussure の学説を全面的に擁護し

辛辣な時枝批判を展開した服部四郎でさえ、「実存体」という用語の誤った理解について大橋保夫<sup>40)</sup>から批判されている。関沢和泉<sup>41)</sup>も言うように、Saussure 学説受容の第一段階で、Saussure の学説自体がわが国における国語学者たちに原文で読まれ理解されたのか、あるいはその邦訳などを介して理解されたかは、今後さらに慎重に検討されるべき課題であろう。

しかしこの時代、新村出の著作にも CLG の言葉を模した、次のような記述が見られる。

言語学は人間言語を、そのあらゆる時空の展開に於いて考察する、極言すれば言語学は言語それ自身のための言語の認識である。<sup>42)</sup>

言語学は言語それ自体のために観察する。<sup>43)</sup>

この下敷きとなった CLG と『原論』ならびに『改訳』の原文は以下の通りである。

*La linguistique a pour unique et véritable objet la langue envisagée en elle-même et pour elle-même.*  
[斜体部原文ママ]<sup>44)</sup>

言語学の独自且つ真正の対象は、直視せる言語であり、言語の為の言語である。[傍点部原文ママ]<sup>45)</sup>

言語学の独自且つ真正の対象は、それ自体としての言語であり、それ自体のための言語である。<sup>46)</sup>

この言葉は CLG を締めくくるものとして殊に有名であるが、この箇所は Saussure の言葉ではなく、編者の Bally と Sechehayer による完全なる創作であることが明らかである。今、新村出の文章から透けて見えるものは、言語研究における Saussure 学説の言葉の模倣だけでなく、当時の言語研究における CLG の影響力の強さである。CLG における不整合の問題は全般的で多岐に渡り、その混沌と編者による創作や書き換え、原文の削除ははなはだし。事実、Saussure の原資料に当たった人間はその内容と CLG の内容とのあまりの違いに一樣に驚きを隠さないが、それは相原奈津江・秋津伶の、

訳出に際し、たびたび『COURS DE LINGUISTIQUE GENERALE』(Ferdinand de Saussure. Publié par Charles Bailly et Albert Séchehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger. Grande Bibliothèque Payot.)、並びにその邦訳である『一般言語学講義』(フェルディナン・ド・ソシュール著、小林英夫訳、岩波書店 2000 年版)を参照した。が、結果は不毛であった。構成が違うため、似ている箇所は確かにあるが、用語自体が違っていたり、該当するコンテキスト自体が違っていたのだ。『COURS DE LINGUISTIQUE GENERALE』は学生のノートからの切り張りを繋いだものでもなく、それらを素材にしてバイイとセシエによって書き下ろされた「創作」であり、い

わゆる文体が異なり、ソシュールの閃きも逡巡も、度重なる慎重な言い換えもそこにはなく、何よりも思索の過程が省かれていて、出してはならない結論が出されていたりするのである。故丸山氏の『ソシュールの思想』『ソシュールを読む』等で、すでに確認されていたこととはいえ、私達はそれを肌で強く感じた。<sup>47)</sup>

という言葉が全てを物語っている。

ではなぜこうした勝手な修正が行われたのか。Mauro<sup>48)</sup>や Lepschy<sup>49)</sup>は、簡略化され万人向けに整えられた CLG の内容を「普及版のためのテキスト」と評したが、小松<sup>50)</sup>も指摘するように、こうした書き換えは Bally と Sechehayé の認識力不足から生れたものではなく、むしろ普及版という性質とそこでの略述であることから必然的に施された加筆修正であると見る方が自然であろう。事実、構造主義の時代に言語学の枠を超えて様々な分野に広範な影響を及ぼしたのも、また今日でもたびたび広く俎上に上げられる CLG の内容と Saussure 学説の批判も、Bally と Sechehayé による創作の普及版としての CLG に対するものであり、この事実は克目に値する。そもそも当時時枝が批判の矢面にしていた Saussure は、その後続々と見つかる Saussure の遺稿や新資料からも、真の Saussure ではないのである。

丸山圭三郎<sup>51)</sup>も、時枝の Saussure 学説批判が的外れであることがあまりにも明らかであると糾弾しつつも、その原因の一端は *unité* を「単位」と訳した小林英夫訳にもあると認める。しかし丸山の真意は単にそんな表面的なものでは決してない。藤井貞和はその点について、

しかし丸山氏としては、時枝が、もっぱら訳語だけで“泰西”の言語学説を吸収していたこと（＝小林英夫の証言による）を問題とする。つまり、翻訳の問題を洗いださない限り、ソシュールの思想はおろか、主著『一般言語学講義』の正確な読み方さえできないだろう、ということと、時枝の批判を鵜呑みにして原典を読まずしてソシュール批判の立場をとる危険性が、現実に存在していたし、いまだに存在している、ということとを氏は言いたかった。<sup>52)</sup>

と指摘するが、きわめて真実であろう。

その点で小林訳は、関沢和泉<sup>53)</sup>が指摘するように、単なる Saussure 学説の「紹介者」などではなく、独自の形でフランス語と日本語の論理を形成しており、それ故に時枝の「誤読」を単なる誤解として片付けるわけにはいかないのである。関沢<sup>54)</sup>の「時枝によるヨーロッパ言語学批判は、単なるソシュールの誤読として出てきたわけではない。（中略）そうではなく、小林によるソシュールを始めとした理論が展開されているフランス語と日本語との比較を通して示された構図（中略）を積極的に転倒することによって、産み出されたのである」という指摘は正しい。

その一方で、小林と『原論』に対する批判も当然ながら存在する。*CLG*の内容の不整合については訳者である小林自身が誰よりもいち早く、また身をもって感じており、それは『講義』の「訳者のはしがき」における、

原文は明晰をきわめた規範的フランス文のようにわたしには思われる。もし本書を難解と評するならば、それは思想そのもの、記述内容そのものの深さによるものであって、壺も文章のせいではない。記述内容を砕いてまで文章の平易化をはかろうという気持ちは、わたしにはない。<sup>55)</sup>

という小林自身の告白からも明らかである。

一方、この問題は世紀を越えた現在でも同じで、

原文の明晰さはその通りだが、それが勢い余って内容まで単純化しているように思われて仕方がない。それに反して、訳文は、難解さに満ちている。<sup>56)</sup>

われわれは時として小林英夫訳『一般言語学講義』（旧版は、『一般言語学原論』）を読んで、その言葉づかひの不自然さ、接続詞の不明瞭さに気がついて原著をひもどくことがある。たいていの場合フランス語の原文にもその不自然さは残され、どこからそれが生れたかと思う。原因は原文のテキストが均一の織物でできていないからだ。<sup>57)</sup>

という嘆きにも似た言葉はあちこちで散見される。こうした批判は小林の訳というより、*CLG*そのものの内容的不具合についての懐疑的な叫びといった方が的を射ている。前述したように、原文の不自然さや不整合をそのまま翻訳に移し替えた小林の翻訳技術の高さについては何の問題もない。小林の翻訳は原文を等価に訳文に移し替えているのであり、その点でも小林の訳は秀逸である。また *CLG*の不自然さが小林訳にあるのではないということは、上の小松英輔の言葉に集約される。

藤井貞和は、

言語学者小林英夫の訳した『(ソシュール)言語学原論』（中略）を仮想敵として、『国語学原論』を最終的にまとめあげていった時枝は、その『(ソシュール)言語学原論』への、いわば確信犯的誤読によって、訳者小林を通りこし、おぼえずソシュールという二十世紀言語学の出発点との世界同時性に立ちいたっている、そういうことではあるまいか。(中略) 幻想にソシュールの教室にまぎれいった一人だったのではないかと錯覚させる感がある。<sup>58)</sup>

と述べるが、まさしく真実であろう。

こうした点からも、時枝の Saussure 学説批判が小林訳を基にした誤解により Saussure 学説の不理解によるものであるという指摘が正しくないことが実証される。

#### 5. 時枝誠記は Saussure を読み誤ったか

時枝による Saussure 学説批判は、中村雄二郎<sup>59)</sup>の批判に代表されるように、時枝のフランス語の不理解と小林訳の誤解に起因するものとして一顧だにされないことが多い。中村は、時枝の Saussure 学説批判を時枝による Saussure の用語法を全く理解していない決定的な誤読によるものであると糾弾する。しかしながら、こうした批判が決して正しくないことはこれまでに見たとおりである。むしろ時枝は Saussure の学説を当時誰よりも読み込み、それを自説の下敷きにし、小林英夫とソシュールの言語論について議論することで自身の国語学を体系化する契機にしようと考えていた節がある。それは時枝の以下の言葉からも明らかである。

日本の優れた言語学者であり、我が畏敬する友である小林英夫氏より、常に泰西の言語学の理論とその業績について幾多の啓発と教示とを親しく受け得ることは感謝に余りあることである。しかしながら、私は必しも（原文ママ）小林氏によって示される理論の実演者ではなかった。寧ろ私は、私の実証的探求の結論を泰西の理論に照し、我自らの非を悟ることがあると同時に、時にはおほげなくも言語学の理論に対して批判の眼を向けざるを得ないこともあった。（中略）以下述べることは、私の国語に就いての実証的研究より得た言語の理論を、先づソシュールの言語理論に照し、私のテーゼに対するアンチテーゼとしてのソシュールの言語理論を述べることによって私の考を組織して見たのである。<sup>60)</sup>

藤井はこの点について、

小林英夫の訳書からうかがう限り、時枝がソシュールを言語の実体論者として批判したことに対し、その程度の言語学ならば今世紀最大の言語学者であるとはどうも言えそうにないことを疑問として、むしろ概念と聴覚映像との関係下に言語を置いて、言語の曖昧性を取りもどすかのように見せるソシュールの動的な言語学のありように、時枝と非常に近い位置にあることを嗅ぎとろうとしていたのではなかったかと思う。<sup>61)</sup>

と指摘するが、けだし真実であろう。一見、小林訳を介する形でなされた時枝の Saussure 学説に対する批判的態度に隠された真意は、Saussure の学説を自説に取り入れながらその補完を目指しつつ、言語過程説における詞と辞を江戸時代の国語学者たちの考えに立ち返るこ

とで西欧の言語理論に追従する日本の言語学界に警鐘を鳴らすものであったことは明らかである。そのことは以下の藤井や井島、高木らの言葉に集約されよう。

『(ソシユール) 言語学原論』を、時枝が批判したとき、それは結果からみると、日本社会での十九世紀的言語学に対する言語観の変更を要求しようとしたのであって、事実上のあいては、たとえば山田孝雄らの“語構成観”であり、時枝が名をあげているのは神保格であり（『原論』、三一ページ）、あるいはさきに引用した保科孝一のような、（中略）いくたりかの考えであって、それらを端的にいつて時枝は乗り越えようとした。<sup>62)</sup>

時枝の言語過程説は必ずしも文法に限られた理論ではないとしても、そこで批判されているソシユールは、実像とは大きくかけ離れていることは否めない。むしろここでは、時枝以前の文法理論、もっと特定すれば時枝の前任者の橋本進吉の文法理論が、ソシユールの名を借りて批判されていると考える方が納得しやすい。<sup>63)</sup>

時枝は明治以降の西欧言語学の影響を受け言語を言語生活から切り離そうとする構成的言語観を批判し、旧来のつまり江戸期以前の国語学者たちによる言語生活に則した研究の可能性を再評価しようとしたのである。<sup>64)</sup>

さらに、北原美紗子は時枝の学問的性質を言語学との位置づけで、

時枝は、日本語の学問である国語学を、ヨーロッパの言語学の一部として扱われることに抵抗した。（中略）日本の伝統的な学問がヨーロッパ言語学によって抹殺されていくことに、危機感を募らせた。（中略）時枝の言語過程説は、日本の国学を近代の言語学に復活させたものとも考えられる。<sup>65)</sup>

と指摘する。こうした両者の類似性の根底にあるのは、藤井の、

旧“ソシユール”を批判すると称する時枝の国語学は、今日の手稿群の発見ののちの旧“ソシユール”を克服する新“ソシユール”の相貌に、どうしても接近してくる。（中略）時枝の批判というのがいわば旧“ソシユール”を超えて言語の空無という“非実体”に迫るソシユール—時枝という連合を形成するかもしれない動きであった可能性は大きい。<sup>66)</sup>

という指摘に全てが表わされていよう。



## 6. Saussure と時枝の学問的類似—むすびにかえて—

CLGで展開された Saussure の学説に異議を唱えた時枝の主張が、1996年に発見された Saussure の自筆草稿と底通することについて、松中(2015)<sup>67)</sup>において解明した。ここでは様々な観点から論考された指摘とあわせて、そうした共通性がどこから来ているかについて考える。

北原美紗子は、

時枝誠記の『国語学原論』と、ソシュールの『言語学原論』とを、読み終って思うのは、ソシュールと時枝との二冊の本の、驚くほどの類似性である。(中略) ソシュールと時枝。二人の天才的な言語学者の論を、慎重に読み進めていくと、前にも述べたが、論の立ち方、議論の展開が非常に似ているのに気付く。<sup>68)</sup>

と指摘する。事実、時枝と Saussure の考えを読み込めば読み込むほど、その類似点に気づかされる。

柴田<sup>69)</sup>が指摘するように、時枝が Saussure を誤解せざるをえなかったのは Saussure の言語学の中に自身の言語観とは相容れない考えが含まれていたからであり、丸山<sup>70)</sup>は「ソシュールの理論を日本の国語教育という特殊な事例にそのまま適用することは出来ない。なぜならソシュールが追求したのは“人間の作り出した文化の根底としての言語”であり、“全ての言語に共通する記号学的原理”だからである」と説く。

この点について、以下の藤井の言葉が端的に的を射ていよう。

時枝の言語学が、言語学とはみずから呼ばれず、国語学と呼ばれてある理由は、いうまでもなく特殊から普遍へ、つまり国語から言語へ、とたどられなければならないとみるからで、すなわち国語のなかに言語を見るのであって、その逆ではない。<sup>71)</sup>

ここにいたって時枝の言語観と Saussure の言語観は、まったくもって相容れない様相を呈する。事実、時枝が批判の矛先とした Saussure 学説におけるラングと主体の関係について時枝自身、

元来ソシュール学の対象とする処の言語なるものは、心的なものであると云われて居るがそれは主体的作用の外に置かれて居るものであって、言語主体がこれを用いる時にはそこに関係が生ずるが、それが無い限り極めて客観的な性質を持ったものであって、これに就いて価値を云うことが既に矛盾して居る。<sup>72)</sup>

と述べて、自身の言語観と相容れないものであることを明言している。しかし時枝の言う

「言語」とその「過程」は、Saussureの言う差異からなる辞項の体系としての *langue* ではなく、*parole* の回路を指しており、それは時枝自身、「もしソシユールの名称を借りるならば」と前置きしながら、

我々の観察の直接にして具体的な対象になるものは、(中略) 精神物理的『言 (パロール)』 循行であって、それ以外のものではない。<sup>73)</sup>

と明言していることから明らかである。

同様に高木敬生は、

時枝の言語過程は Saussure の発話の回路とほぼ同様の形式をとっていると言ってよいだろう。(中略) 言語記号における聴覚映像と概念との内的関係が必然的ではないということは、ソシユール以来の研究によって言語の特性の一つとして認められるべきものであるように思われる。となれば、その観点を欠いた概念過程とはやはり見直されるべきであろう。その概念過程を補完するためにソシユールのラング概念は言語過程説と共存できる概念なのではないだろうか。<sup>74)</sup>

と指摘する。一方藤井は、

時枝の国語学とソシユールのラング (= 言語) 言語学とは、おそらく、ともに成立する。許されないのは時枝の国語学のなかに、そのラングを安易に持ちこむことと、反対に、ラング言語学のなかに時枝の国語学を取りこむこととだろう。<sup>75)</sup>

と述べるが、けだし至言である。さらに、藤井は両者の学問的類似について、

ソシユールの言語観は、時枝の《言語過程説》のそれにきわめて近接し、言語を記号 (シーニュ) 一般へ解消することへの懸念がつよくうかがえるのは (中略) 言語という、いわば “ない” 存在にふれていった両者の相似を十分にうかがわせる性格が見られる。<sup>76)</sup>

と指摘する。

町田健 (2000: 74-75)<sup>77)</sup> は、音と概念の結びつきを Saussure は「記号」と呼び、時枝はその結びつきを決めるのが言語の本質であると主張しているとして、まるで 100 メートルを 10 秒で走ったというのと時速 36 キロで走ったというようなもので、表し方の違いだけで両者は同じことを言っていると、ぱっさりと切り捨てる。松澤 (2011)<sup>78)</sup> も「言語過程説のソ

シュールの側面」]として指摘しながら、心的な音韻と主体的音声意識の側面について明らかにされていない点や、心的実存対と概念化の問題について言語を通して主体の形成が成立する点に触れられていないという点で、時枝の主張する言語過程説が Saussure 学説と変わらないと見る。そして松澤の、

おそらく時枝は、一方では通説に従ってソシュールをラングの言語学の提唱者と見なし批判しながら、他方では主体的言語意識を重視した側面を、自説を形成あるいは補強するために、積極的に摂取していったのではないかと思われる。<sup>79)</sup>

という指摘は、衝撃的であるが事実であろう。そして時枝は自身の研究のバックボーンを、「私はイエスペルセン氏と共に「言語の本質は何か」の問を発することから始めようとした。」<sup>80)</sup>と明言している。そうすれば、Saussure に反意を露にし、構造的言語観に疑問を投げかける時枝の主張は、Saussure の言語観に通じ、Chomsky の分析法に通う部分が実に多い理由も納得できる。

松澤も憶測するように、時枝は CLG の本文における不整合や矛盾にまで読解と理解を深めており、そうした問題点にすでに気づいていたと考える方が自然である。しかしその反面、Saussure 学説を批判することで自身の言語過程説の限界も自ずと露呈したことは、予想外の諸刃の剣であったに違いない。そして町田<sup>81)</sup>も言うように、逆説的ではあるにせよ、Saussure 批判を展開することではからずも Saussure 学説に対する日本の言語学界の関心を呼び起こしたことは、不本意ながら時枝の大きな功績の一つなのかもしれない。

いずれにしても、言語実存観の克服をめぐる苦悩と苦闘は Saussure にしても時枝にしても共通の姿勢であり、そこに今日的な人間主体の言語研究の原点を見出すことができるのである。

## 註

- 1) 本稿は 2014 年 11 月 29 日 (土)～30 日 (日) に国際基督教大学において開催されたアジア文化研究所公開シンポジウム「アジア文化研究のいま」における筆者の研究発表「ソシュールの『言語学原論』と時枝誠記の『国語学原論』における主観的言語観について」の内容に加筆、修正を施した発展的後続研究の一部である。また本研究を進めるにあたっては、2017 年度久留米工業大学学長裁量費 (教育研究費)「課題名：ソシュール学説の意味論的再検討とそれに基づく意味研究」の助成を受けた。
- 2) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941 年、60-61 頁。
- 3) 同上、92 頁。
- 4) 小林英夫「日本におけるソシュールの影響」『月刊言語』1978 年 3 月号、大修館書店、1978 年、48 頁。
- 5) 神保格『言語学概論』岩波書店、1922 年、354 頁。

- 6) Godel, R. *Les Sources Manuscrites du Cours de Linguistique Générale de F. de Saussure*, (Genève, Droz, Paris: Minard.1957).
- 7) Engler, R. *Cours de Linguistique Générale, Edition Critique*, (Wiesbaden:Harrasso-witz. 1968).
- 8) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年。
- 9) 丸山圭三郎『ソシュールを読む』岩波書店、1983年。
- 10) 前田英樹訳・注『ソシュール講義録注解』法政大学出版局、1991年。
- 11) Eisuke, K. *F. de Saussure Cours de Linguistique Generale. Premier et troisième cours d'après les notes de Riedlinger et Constantin*, (Collection Recherches Université Gakushuin n°24.Tokyo: Gakushuin University, 1993) / Eisuke, K. *F. de Saussure Troisième cours de Linguistique General (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin*. Paris: Pergamon Press, 1993 / 小松英輔『ソシュール自筆原稿の研究』平成6年～平成8年度科学研究費補助金基盤研究B(2)研究成果報告書課題番号06451091、1994年 / Eisuke, K. *F. de Saussure Premier Cours de Linguistique Generale. (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, (Paris: Pergamon Press, 1996) / Eisuke, K. *F. de Saussure Deuxième Cours de Linguistique Generale. (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*. (Paris: Pergamon Press, 1997).
- 12) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年 / 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第二回講義(1908-1909)』エディット・パルク、2006年 / 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第一回講義リードランジェによる講義記録』エディット・パルク、2008年 / 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義<増補改訂版>』エディット・パルク、2009年。
- 13) 町田健『ソシュール入門——コトバの謎解き』光文社、2003年 / 町田健『ソシュールのすべて言語学でいちばん大切なこと』研究社、2004年 / 町田健『ソシュールと言語学』講談社、2004年。
- 14) 加賀野井秀一『知の教科書ソシュール』講談社、2004年。
- 15) 相原奈津江『ソシュールのパラドックス』エディット・パルク、2007年。
- 16) 松澤和宏校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集I 自筆草稿『言語の科学』』岩波書店、2013年。
- 17) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941年、60-61頁。
- 18) 同上、92頁。
- 19) 小林英夫「日本におけるソシュールの影響」『月刊言語』1978年3月号、大修館書店、1978年、48頁。
- 20) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941年、84頁。
- 21) 松中完二「Saussure と時枝誠記の主體的言語観についての再検討——Cours de Linguistique Générale と『国語学原論』を基に——」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究別冊』第20号、国際基督教大学アジア文化研究所、2015年、159-175頁。
- 22) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、288頁。
- 23) 小松英輔著；相原奈津江編『もう一人のソシュール』エディット・パルク、2011年、36頁。
- 24) 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年、x頁。

- 25) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、299頁。
- 26) 丸山圭三郎「ソシュール・その虚像と実像」『現代思想特集：ソシュール』第8巻、第12号、青土社、1980年10月号、85頁。
- 27) 井島正博「日本語文法から見たソシュール」『月刊言語』2007年5月号、大修館書店、2007年、52頁。
- 28) 小林英夫「翻訳の問題」『小林英夫著作集3 言語学論集3』みすず書房、1977年、409-410頁。
- 29) Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale*, (Paris: Payot, 1916), 161.
- 30) 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年、163頁。
- 31) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、288-289頁。
- 32) 小松英輔著；相原奈津江編『もう一人のソシュール』エディット・パルク、2011年、x頁。
- 33) 小林英夫「日本におけるソシュールの影響」『月刊言語』1978年3月号、大修館書店、1978年、48-49頁。
- 34) 井島正博「日本語文法から見たソシュール」『月刊言語』2007年5月号、大修館書店、52頁。
- 35) 金田一京助「言語学原論を読む」『民族』第三巻第三号、民族発行所、1928年、131頁。
- 36) 福井久蔵『国語学史』厚生閣、1942年、485頁。
- 37) 亀井孝「言語学原論」国語学会、1955年、314頁。
- 38) 時枝誠記『国語学史』岩波書店、1940年、172頁。
- 39) 高木敬生「言語の社会性について——ソシュールと時枝から——」成城大学大学院文学研究科『エウローペー』No. 21、2014年、57頁。
- 40) 大橋保夫「ソシュールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討（上）——「言語は実存体ではない」をめぐる——」『みすず』第15巻、第8号、1973年8月号、みすず書房、2-15頁。
- 41) 関沢和泉「時枝誠記はソシュールを「誤読」したか？：日本のソシュール受容史における小林英夫の役割についての序論」東日本国際大学東洋思想研究所『研究東洋：東日本国際大学東洋思想研究所・儒学文化研究所紀要』3号、2013年、97頁。
- 42) 新村出『言語学序説』星野書店、1943年、1-2頁。
- 43) 同上、12頁。
- 44) Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale* (Paris: Payot, 1916), 317.
- 45) 小林英夫訳『言語学原論』岡書院、1928年、478頁。
- 46) 小林英夫訳『改訂新版言語学原論』、岩波書店、1940年、311頁。
- 47) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義 (1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、298-299頁。
- 48) Mauro, T. De. *Ferdinand de Saussure Corso di linguistica generale Introduzione, traduzione e comment.* (Bali: Laterza 1967), LIV.
- 49) Lepschy, G. *A Survey of Structural Linguistics.* (London: Faber and Faber Ltd, 1970), 43.
- 50) 小松英輔著；相原奈津江編『もう一人のソシュール』エディット・パルク、2011年、43頁。
- 51) 丸山圭三郎『ソシュールを読む』岩波書店、1983年。
- 52) 藤井貞和『国文学の誕生』三元社、2000年、138頁。
- 53) 関沢和泉「時枝誠記はソシュールを「誤読」したか？：日本のソシュール受容史における小林英夫の役割についての序論」東日本国際大学東洋思想研究所『研究東洋：東日本国際大学東洋思想

- 研究所・儒学文化研究所紀要3号』2013年、92-93頁。
- 54) 同上、106-107頁。
  - 55) 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年、x頁。
  - 56) 相原奈津江・秋津伶記『フェルディナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、299頁。
  - 57) 小松英輔著；相原奈津江編『もう一人のソシュール』エディット・パルク、2011年、36頁。
  - 58) 藤井貞和『国文学の誕生』三元社、2000年、103-104頁。
  - 59) 中村雄二郎「制度としての日本語」『中村雄二郎著作集Ⅲ言語論』岩波書店、1971-1993年。
  - 60) 時枝誠記「心的過程としての言語本質観(一)」『文学』五卷五号 岩波書店、1937年、7-8頁。
  - 61) 藤井貞和『国文学の誕生』三元社、2000年、140頁。
  - 62) 同上、104頁。
  - 63) 井島正博「日本語文法から見たソシュール」『月刊言語』2007年5月号 大修館書店、2007年、52頁。
  - 64) 高木敬生「言語の社会性について——ソシュールと時枝から——」成城大学大学院文学研究科『エウローペー』No. 21、2014年、60頁。
  - 65) 北原美紗子「時枝誠記の『国語学言論』を読む——ソシュールの『言語学言論』を併せ読みつつ——」『清泉女子大学紀要51』清泉女子大学、2003年、24頁。
  - 66) 藤井貞和『国文学の誕生』三元社、2000年、139-140頁。
  - 67) 松中完二「Saussure と時枝誠記の主体的言語観についての再検討——*Cours de Linguistique Générale* と『国語学原論』を基に——」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究別冊』第20号 国際基督教大学アジア文化研究所、2015年、159-175頁。
  - 68) 北原美紗子「時枝誠記の『国語学言論』を読む——ソシュールの『言語学言論』を併せ読みつつ——」『清泉女子大学紀要51』清泉女子大学、2003年、22-24頁。
  - 69) 柴田健志「言語と主体：時枝誠記のソシュール批判再考」京都大学大学院文学研究科哲学研究室『京都大学文学部哲学研究室紀要：Prospectus 2』、1999年、29頁。
  - 70) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年、227頁。
  - 71) 藤井貞和『国文学の誕生』三元社、2000年、130頁。
  - 72) 時枝誠記「言語に対する二の立場——主体的立場と観察者の立場——」国語文化研究所『コトバ』1940年7月号、11頁。
  - 73) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941年、71頁。
  - 74) 高木敬生「言語の社会性について——ソシュールと時枝から——」成城大学大学院文学研究科『エウローペー』No. 21、2014年、68-70頁。
  - 75) 藤井貞和『国文学の誕生』三元社、2000年、120頁。
  - 76) 同上、103頁。
  - 77) 町田健『日本語のしくみがわかる本』研究社出版、2000年、74-75頁。
  - 78) 松澤和宏「時枝誠記の〈主体的立場〉とソシュールの〈話者の意識〉——言語の科学と解釈学」釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房、2011年、108頁。
  - 79) 同上、117頁。
  - 80) 時枝誠記『国語学への道』三省堂、1957年、33頁。
  - 81) 町田健『ソシュールと言語学』講談社、2004年、146頁。